

新曲紹介

友よ函館から

詞・曲 黒坂黒太郎

F Dm Gm C7 F

とともよこここのまちで はか るをま と う
 ともよこここのまちで はか るをま と う
 おきそい は る だ け ど は る は は こ
 た えく そ さん の だ こ と ば い た く り し は る は は こ
 だ た て の か ぜ の は な い か に は い つ も 一 は げ ま し が
 だ て の や ま ち に さ 一 つ い た お ん が く の 一 じ さ ま し り く な
 が き み の ほ ほ え み の な か に は い つ も 一 は げ ま し が
 て き み の ふ り 一 む く ひ と あ 一 す を そ た て て き た の だ ろ う

函館は毎年のようにコンサートやっている町です。フォークシンガーとして音楽活動を始め、まだコンサートがほとんどなかったころに声をかけてくれたのも函館でした。矢口周美が歌うキッカケを作ってくれたのも函館でした。昨年11月末、その函館の教会で「里唄コンサート」を行いました。その時に函館の皆さんに送った曲です。You tube(ユーチューブ)で函館の美しい映像と共に公開していますので、ご覧になって下さい。

編集後記

フェイスブックというインターネットのサイトをご存じですか?「チュニジア、やエジプトの民主化運動を起こす原動力になったのはフェイスブック」と言われています。日本に前からあるミクシイなどと同じソーシャルネットワーク(交流サイト)のひとつですが、最大の特徴は「実名で行う」、ということにあります。これは今までのインターネットのあり方を根本から覆したものです。これまでネットの世界は掲示板にしる、動画投稿にしる、メールでさえ「匿名」が横行してきました。これが時として人を傷つけ、子ども達を自殺に追い込み、多くの人々がネット不信になりました。それを

「実名」で展開する。ここには責任と共に信頼が生まれます。僕も韓国人の友人に誘われて入ってみました。するとしばらく音信がなかったアメリカ人や、アイルランドに住む友人達からどんどん「お久しぶり」と連絡が入り交流が復活しました。そしてその友達の友達と友達になりました。ハーバード大学のたった一人の学生から始まり今や全世界6億人が入っているそうです。(映画も見ました)この殺伐とした時代、実名をあかし繋がり合っていく。今人々が求めているのはネットという砂漠の中の「信頼」なのかも知れません。興味のある方はどうぞ。(黒)

コカリナ15周年
連続コンサート ファイナル

美智子皇后さまもご来場



180名の大合奏による「交響詩ふるさと『春』」

1月15日すみだトリフォニーホールにて昨年春より各地で行ってきた「コカリナ15周年コンサート」ファイナルが行われました。当日は厳しい寒さの中、首都圏、及び全国から沢山のお客さんが駆けつけてくださり1800席のチケットは完売。さらには美智子皇后さままでご来場下さり、大変盛り上がりました。美智子皇后様は長野オリンピック以来のコカリナファンであり、ご自分でも演奏されます。以前から一度コカリナのコンサートを鑑賞されたい、と思われていたそうです。

プログラムの前半は黒坂黒太郎のソロから始まり、コカリナの中編成、吉田秀さんのコントラバスソロ、そして1部の締

めくりは150名の大編成による「グノーのアベマリア」「大樹の祈り」。その中でも「グノーのアベマリア」はバリトントリプル、バスコカリナの大編成という今までになかった低音部コカリナのアンサンブルで演奏したのですが、その重厚な響きに会場から鳴りやまぬ拍手をいただきました。そして2部は開幕と共に180名による交響詩「ふるさと」第三楽章「春」。そこから、昨年秋コカリナと歌によりCD化された「里唄」へと続きます。最後はやはり「被爆樹コカリナ」、「鳥の歌」と「アメージンググレイス」をコカリナ講師を中心にした中編成グループの合奏をバックに高らかに奏でました。



黒坂黒太郎(正文)
コンサートニュース

第99号
2011.2.20

発行
黒坂音楽工房
東京都江東区大島
5-34-17-2F
Tel. 03-5626-1581
Fax. 03-5626-1568

ホームページアドレス
http://www.kocarina.net

「コカリナ15周年コンサート」ファイナル

ご来場下さったお客さんから沢山のご感想が寄せられました。その中からいくつか。

☆ 心暖まる感動の時間でした。詩と曲が遠い里山の風景を思い起こさせ懐かしさと今を生きる勇気と感謝を感じ、荘厳な一時でした。息をしていた樹々の音色があまりにも素敵で美しく、心揺すぶられました。また周美さんの歌声に魂の叫びを感じました。澄んだ素直な声、心優しい声、慈愛あふれる声に初めての曲が多かったのですが、私の心に語りかけてくださり感動の涙となりました。(被爆樹コカリナは)聴いているときに広島のおい、広島の風を感じ、原爆で亡くなった方々のやさしい顔が浮かび暖かい気持ちでいっぱいになりました。これから毎日里唄のCDを聴いて一緒に口ずさみストレスを解消させていただきます。(船橋市 中山みよ子さん)

☆ CDという物を自分で買ったことがなかったが、どうしても買いたくなって生まれて初めて買い、毎日主人と聴いています。

☆ コカリナの音色と周美さんの歌声が広い会場全体に響き、暖かく包み込んでくれる。出演者のお人柄が伝わってくる素敵なコンサートでした。コカリナアンサンブルの人数の多さにも驚きました。コカリナが日本中、世界中を旅して沢山の人々と出会い出会った人々の心を乗せて広まった、という15年の深さを感じました。15年前の子ども達が黒坂さんのコカリナを聴きながら育ち、巣立って行ったことが走馬燈のように浮かび、こんな世界に浸れるのもコカリナの魔法なのでしょうね。ありがとうございました。(所沢市 芳賀江江さん)

☆ 音色が美しく、特に“鳥の歌”は素晴らしい、涙が出たと多くの方が言っています。

当日プログラムより

ごあいさつ

本日はお忙しい中「コカリナ15周年記念連続コンサートファイナルステージ」にお出かけ下さり本当にありがとうございます。

このコンサートはコカリナが始まってから15年を記念して、昨年、名古屋しらかわホール、神戸松方ホール、軽井沢大賀ホールと連続して行われてきたコンサートの最後を締めくくるコンサートとして企画されたものです。

コカリナは今から16年前のちょうど今頃、阪神・淡路大震災の被害が痛々しく伝えられる中で、天から降ってきたかのように私が手にした、たった1本のハンガリー製の小さな笛から始まりました。それを日本の匠と呼ばれる木工家の皆さんが古くから伝わる高度な木工技術をふるに使い、素晴らしい演奏楽器に成長させてくれました。

また、コカリナ協会公認講師を始めとする沢山のコカリナ愛好家の皆さんが人から人へ丁寧にこの楽器の素晴らしさを伝えてくださり、全国に数限りない合奏団、サークルが誕生しています。

さらには、多くの内外の音楽家、プロデューサーの皆さんがコカリナの発展に協力して下さり、昨年1月にはウィーン楽友協会コンサート、鳴りやまぬカーテンコールの拍手をいただき帰国する事ができました。

本日は、その時のプログラムを中心に、新しく始まった「里唄」の世界も含めて楽しんでいただければと思っています。

今年が皆さんにとって良い年でありますように、心からお祈り申し上げます。

2011年 1月15日

黒坂黒太郎

里唄コンサートをあなたの町でも

昨年11月にキングレコードから発売された「里唄」CDが各地で反響を呼んでいます。それぞれの地域のコミュニティFMで何度もかけていただいていた、「筑波山」では「筑波神社」がCD販売に協力してくださったり、佐渡も島を上げて普及活動に取り組んでくださっています。「里唄」CDについて沢山感想が寄せられています。

童謡や唱歌が大好きですが、里唄はとてはやさしく暖かく聞いて心が癒されます。

周美さんの歌声が大好きです。バックで流れるコカリナもぴたりで心地よい気持ちになります。ヨガの時、よく聞いています。思わず次のポーズを忘れて聴き入ることが多々あります。

その土地の歌「里唄」を創り、歌い、コカリナを奏で、その土地の素晴らしさを感じ合う黒坂黒太郎と矢口周美のコンサートを2011年は関東甲信越地域で展開します。是非、ご企画下さい。詳しくは黒坂音楽工房まで。

ジョー・オダネル写真展

「トランクの中の日本」という写真集をご存じですか?右の少年の写真を見たことがある方も多いと思います。2年ほど前、NHKスペシャルでも取り上げられ話題になった写真です。太平洋戦争終結直後の1945年9月、従軍カメラマンだった米国人ジョー・オダネル氏は広島、長崎などの被災状況を記録する任務を与えられ日本に上陸、その後7ヶ月に渡り撮影し続けました。オダネル氏はカメラのレンズに映った広島、長崎の「この世のものとは思えない」ありさまに強い衝撃を受け、軍の「人物を撮ってはならない」という命令に背き、私的カメラで被災者を撮り続けました。帰国後、ホワイトハウス付きのカメラマンとなったオダネル氏は、そのネガを密かに米国に持ち帰ったものの「そのあまりにももの強烈さにたじろぎ、すべてを忘れよう決心」(著書より)屋根裏



焼き場に立つ少年
背中の赤ん坊は死んでいる

のトランクの中に鍵を掛け封印したのです。でもオダネル氏は広島長崎で見た光景にさいなまれ、不眠症になり、精神疾患にまで追い込まれます。また、被爆地を歩き回った事による「入所被爆」の影響で入退院を余儀なくさせられます。そして封印から34年経った1989年、オダネル氏は「もう逃げるのはよそう、自分の気持ちに正直になろう」(著書より)と、そのトランクの鍵を開け、テネシー州ナッシュビルにて原爆写真展を開催します。それは勇気ある行動と評価される一方、「原爆を正当なもの」と教育されているアメリカ人からは非難され、その後スミソニアン博物館でも一旦企画されるものの、アメリカ国内の在郷軍人らによって中止に追い込まれます。でもその写真展は、ドイツハンブルグ、ウィーン、ベルリンなどで開催され大きな反響を呼びます。

この写真展が昨年6月、千葉県流山市で「黒坂黒太郎コカリナコンサート」と併せて行われました。写真展には多くの市民が来場、黒坂コンサートも平日の昼間だというのに、1000人収容の文化会館が満席になる大盛況。企画は大成功のうちに幕を閉じました。その写真展が、今年7月函館。8月には長野県上田市にある無言館で行われます。8月15日には黒坂コンサートも無言館にて予定されています。是非お出かけ下さい。